

長岡市埋蔵文化財発掘調査報告書

# 立矛南遺跡

—特別高圧線鉄塔建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2007

新潟県長岡市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、新潟県長岡市来迎寺字原 3325 番地 1 ほかに所在する立矛南遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、東北電力株式会社による特別高圧線鉄塔建設工事に伴うものであり、長岡市教育委員会が実施した。
3. 遺跡確認試掘調査に要した経費は文化財保護部局である長岡市教育委員会が負担し、国庫および県費の補助金交付を受けた。本発掘調査に要した経費は原因者である東北電力株式会社が負担した。
4. 遺物の註記は、遺跡略号 (TM) と調査年度 (06) とを組み合わせた「TM06」に統一して遺物番号を記入した。
5. 遺構番号は、土坑略号 P の後に大グリッドごとの通し番号を記した。
6. 遺構平面図は簡易遺り方実測で作成した。
7. 本書は本文と巻末図版 (図版・写真図版) とで構成される。
8. 本書の執筆・編集は調査担当が行った。
9. 本報告書の内容は先行する全ての報告・記載に優先する。
10. 調査の体制は以下のとおりである。

調査主体	長岡市教育委員会	教育長	笠輪春彦 (平成 18 年 12 月 31 日まで)
			加藤孝博 (平成 19 年 1 月 1 日から)
調査担当	長岡市教育委員会科学博物館 学芸員	新田康則	
事務局	長岡市教育委員会科学博物館 (館長 山屋茂人)		
現場代理人	近田恒夫		
発掘作業員	金子正男・小杉信二・間めぐみ・平沢新一・平沢友一郎		

11. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々より多大なるご教示・ご協力を賜った。記して厚く御礼申し上げる。(五十音順・敬称略)

青山重雄・石坂圭介・小林肇・佐藤清・白井綾子・永井寅雄・長澤展生  
株式会社 E & C マクロム・帝国石油株式会社長岡鉱場・新潟県教育庁文化行政課・元町町内会・  
株式会社ユアテック中越営業所

## 目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯.....	1
第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境 .....	2
1 遺跡の位置	
2 周辺の遺跡	
第Ⅲ章 調査の方法と経過.....	4
1 遺跡確認試掘調査	
2 本発掘調査	
第Ⅳ章 調査の成果 .....	6
1 遺跡の概要	
2 調査区の堆積状況	
3 遺構と遺物の分布	
4 遺物	
第Ⅴ章 まとめ.....	11
引用参考文献	

## 挿図・表目次

第1図 立矛南遺跡の位置と周辺の遺跡	3
第2図 越路原の地形ダイヤグラム	3
第3図 試掘トレンド設定図	4
第4図 遺構と遺物	7
第1表 調査工程表	5
第2表 遺構観察表	8
第3表 遺物観察表	9

## 図版目次

図版 1 遺構全体図
図版 2 遺構断面図
図版 3 遺物分布図
図版 4 遺物実測図
図版 5 調査状況(1)
図版 6 調査状況(2)
図版 7 調査状況(3)
図版 8 調査状況(4)
図版 9 出土遺物

## 第Ⅰ章 調査に至る経緯

平成 15 年 12 月 4 日、東北電力株式会社新潟支店（以下、東電新潟支店と略称）から越路町教育委員会（当時、以下、町教委と略称）に対し、帝国石油株式会社長岡鉱場内に新設される発電所からの特別高圧線敷設工事に係る埋蔵文化財の取扱いについて協議の申し入れがあった。その事業内容は新規発電所から 4 地点の鉄塔及び地下埋設を経由して東北電力来迎寺変電所に至るものであった。町教委は工事計画図面等を検討した結果、鉄塔建設用地については立矛遺跡（弥生時代中期）・下並松遺跡（縄文時代後・晩期）などの近接地となるため、遺跡確認試掘調査（以下、試掘調査と略す）が必要であり、地下埋設区域についても一部調査対象となると回答した。

平成 16 年 4 月 20 日に町役場関係部局と東北電力株式会社との全体協議が実施された。この中で、道踏埋設区域については東電新潟支店が実施する既設埋設物調査の際に立会調査、一方、鉄塔建設用地については年内に試掘調査を実施して、事後の協議資料とすることとなった。

東電新潟支店より町教委に対し、平成 16 年 5 月 18 日付で既設埋設物調査に伴う立会調査の依頼があった。6 月 3 ～ 10 日に実施した立会調査の結果、道路埋設区域に関しては遺跡包蔵の可能性が極めて低く、以後埋蔵文化財保護行政上の措置は必要ないと判断し、その旨を回答した。この後、大きな計画変更が生じるなど、開発事業が一進一退し、埋蔵文化財の取扱いについての協議も中断・再開を繰り返した。

平成 18 年 1 月に入り、鉄塔 7 地点と地下埋設を経由する敷設ルートと、その工事着手を 8 月中旬とする変更事業計画が決定し、取り扱い協議も本格化した。そして、地下埋設区域については 3 月下旬以降の既設埋設物調査に伴う立会調査、4 月中に鉄塔建設用地の試掘調査を実施することとなった。

平成 18 年 4 月 4 日付け東北電新支用取得第 3 号で、長岡市教育委員会（以下、市教委と略称）に対し鉄塔用地の試掘調査が依頼された。平成 18 年 4 月 13 日付け長教博第 18 号で県教育委員会教育長に文化財保護法第 99 条第 1 項の規定による埋蔵文化財発掘調査を報告し、4 月 18 日～ 19 日・5 月 10 日に試掘調査を実施した。調査の結果、3 地点において縄文時代の埋蔵文化財包蔵地を確認した。そして、当該範囲が立矛遺跡の南側に位置することから「立矛南遺跡」と命名し、平成 18 年 5 月 25 日付長教博第 93 号で周知化の手続きを行った。埋蔵文化財保護行政上の立場から遺跡範囲内での開発についての取扱い協議を重ねたが、立地・工法等の変更是極めて困難であり、本発掘調査の実施が避けられないという方向性が示された。そして、平成 18 年 5 月 24 日付け長教博第 97 号で、東電新潟支店に対し、1 地点については本発掘調査、ほか 2 地点については遺物が希薄なため慎重工事による対応が必要であると回答した。

東電新潟支店から県教育委員会教育長に対し、平成 18 年 5 月 29 日付東北電新支用取得第 8 号により文化財保護法第 93 条第 1 項の規定による埋蔵文化財発掘の届出を行い、これに対し、平成 18 年 6 月 26 日付教文第 440 号により工事前に発掘調査を実施するよう通知された。

平成 18 年 6 月 26 日付東北電新支用取得第 9 号で、東電新潟支店から市教委教育長に立矛南遺跡における本発掘調査の依頼があり、市教委はこれを受諾した。その際、調査期間（現地発掘調査～調査報告書刊行）を平成 18 年 6 月 28 日から平成 19 年 3 月 31 日とし、経費を現物支給の方法により東北電力株式会社が負担することが取り決められた。

平成 18 年 6 月 27 日付長教博 131 号「埋蔵文化財発掘調査の報告について」で県教育委員会教育長に対して文化財保護法第 99 条第 1 項の規定による発掘調査の着手を報告し、本発掘調査を開始した。

## 第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境

### 1 遺跡の位置（第1図・第2図）

立矛南遺跡は新潟県長岡市来迎寺地内に所在する。来迎寺を含む旧三島郡越路町—現在の長岡市越路地域—は新潟平野の南端部に位置している。この地域を信濃川流域（平野）とその支流渋海川流域（丘陵）、二つの地域に分ける大きな地理的障壁が越路原である。

越路原は信濃川左岸に形成された6面の河岸段丘のうち、越路原I段丘（形成年代：約12万年以前）・越路原II段丘（形成年代：約10万年以前）・越路原III段丘（形成年代：約5万年以前）の総称である。越路原とその東側の小栗田原段丘は、形成時には信濃川に向かって緩やかに傾斜する地形面であったと推測されている〔柳 1998〕。しかし、越路原を通る片貝—真人背斜（隆起）と、小栗田原段丘を通る小千谷向斜（沈降）の褶曲運動によって舌状に独立した台地として新潟平野に迫り出している。また、片貝—真人背斜と小千谷向斜の活褶曲は10万年間の変動量が80mに達する大規模なものであり、国内で最も地盤変動の激しい場所の1つである。

また、片貝—真人背斜をトラップとして形成された天然ガス鉱床である南長岡・片貝ガス田は国内最大級の埋蔵量を誇る大型ガス田である。片貝ガス田が1960年以降、片貝ガス田の北に隣接する南長岡ガス田は1979年から開発が進められており、現在では国内最大の生産地となっている。また、越路原での天然ガス開発事業に伴い、中山遺跡や朝日原遺跡の発掘調査が実施されている。

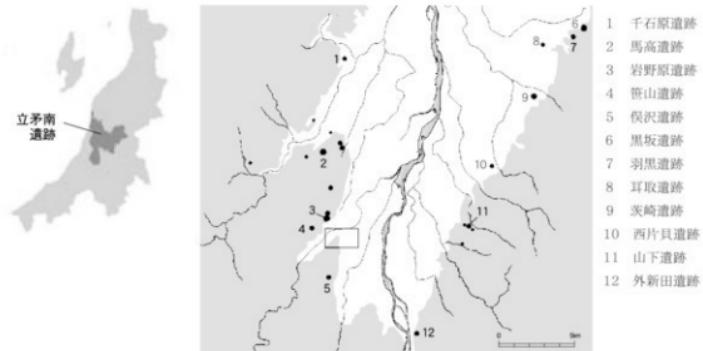
本遺跡は越路原II段丘東縁部の緩斜面地に位置する。標高は約88mを測り、信濃川の現河床面との比高差は約62mである。信濃川までは直線で約3.0km、渋海川までは同じく約1.4kmの位置にある。

遺跡の範囲は弥生時代中期初頭と主体とする立矛遺跡の南側に隣接しているが、両者は浅い開析谷によって区分されるものと推測される。これは、現在ここに越路原と来迎寺集落を繋ぐ道路が切通し状に通っていることからも窺えよう。

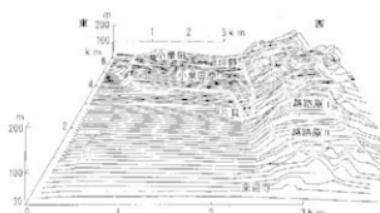
### 2 周辺の遺跡（第1図）

今回の調査では、縄文時代中期前葉の活動痕跡が確認された。したがって、以下では当該時期における周辺の遺跡について概観したい。この時期に形成された遺跡は周辺地域に比較的多く残されている。丘陵や台地の端部に遺跡が確認されており、後続時期のように丘陵の内部や小河川の上流域では遺跡が確認されていない。

越路原では、越路原I段丘に上並松遺跡（初頭～前葉）・朝日原遺跡（初頭）・中山遺跡（前葉）、越路原II段丘に小千谷市保沢遺跡（前葉）などの小規模集落が確認されている。また、信濃川左岸の東頸城丘陵北端部（西山丘陵）では丘陵縁辺部に拠点的な集落遺跡・馬高遺跡や岩野原遺跡が立地し、その周辺に転堂遺跡・南原遺跡・松山遺跡・雉子打場遺跡・笹山遺跡などの小規模な集落遺跡が分布する傾向がある。すでに駒形が岩野原遺跡と笹山遺跡との関係から「地域における遺跡相互間の役割り」についての示唆がある〔駒形 1981〕。そして、信濃川右岸の魚沼丘陵（東山丘陵）では、まず茨崎遺跡をあげることができる。この遺跡は丘陵東端部の緩斜面地に位置する遺跡であり、表採資料の内容からはこの地域ではかなり拠点性の高い集落遺跡であると推測される。また、信濃川に注ぐ支流（小河川）ごとに西片貝遺跡・山下遺跡・長者原遺跡・外新田遺跡などの小規模な集落遺跡が分布する。そして、その近隣に散布地的な遺跡が分布する。



第1図 立矛南遺跡の位置



第2図 越路原の地形ダイヤグラム  
〔飯川1991〕より転載

### 第Ⅲ章 調査の方法と経過

#### 1 遺跡確認試掘調査（第3図）

**調査の方法** 試掘調査は、平成18年4月18日・19日・5月10日の3日間の日程で実施した。鉄塔用地5ヶ所に対し、合計7本のトレンチ調査を行った。調査面積は約28m<sup>2</sup>であり、これは調査対象面積の約3.8%にあたる。

調査は0.45m級バックホーによるすき剥ぎによって進め、遺物が検出された時点で、ジョレンによる人力掘削に切り替える、という方法を採った。そして黄褐色風化火山灰土層を造構確認面とした。1Tについては、既に黒ボク土層が削平されていたこともあり、黄褐色風化火山灰土層中の文化層検出を目的とした深掘調査を実施した。遺物の出土位置情報および造構図は簡易やり方実測(S=1/20)で記録した。記録写真の撮影にはキャノン EOS-Kiss digital(レンズ18~55mm)を使用し、JPEG形式で記録した。

**調査の概要** 調査対象区域は昭和40年代に「越路原総合開発事業」の土地改良工事が実施されており、全体的に大規模な削平を受けていると予想された。しかし、調査地点においては概して黒ボク土層が残存しており、3本の試掘トレンチ(2・3・6T)で縄文時代に帰属する遺物を確認するに至った。遺物は合計22点出土した。その内訳は縄文土器片21点・被然赤化した礫1点である。これら出土遺物は縄文時代中期前葉に位置づけることができる。その他、4T表土中に土師器片1点を確認した。

**調査の成果** 以上により、当該区域は土地改良工事の影響を受けている部分があるものの、縄文時代の遺物包含地が残存していることが確認できた。今回「立矛南遺跡」として周知化した範囲は南北約340m×東西約150mであり、2T部分で造構プランが確認され、遺物の分布密度が最も濃い。この評価を下地として埋蔵文化財保護行政上の協議を進めることになった。



第3図 試掘トレンチ配置図 (S = 1/4,000)

## 2 本発掘調査

**調査の方法** まず、試掘調査の成果と開発計画とを勘案し、No.4 鉄塔建設用地（2 T）に本発掘調査区を設定した。工事が鉄塔建設であるため、遺物包含層に影響の生じる基礎部分（13 × 13 m）の中心点を利用して、用地内に 10 m グリッドを設定して測量杭を打設した。そして、この測量杭を基準として調査区に 10 m 方眼の大グリッドを設定した。グリッドは西から東へ向かう X 軸方向にアラビア数字の 1 ~ 3、北から南への Y 軸方向にアルファベットの A ~ C とし、両者を組み合わせてグリッド名称とした。更に、大グリッド内に 1 × 1 m 方眼を設定し、記録の簡便性を図った。

表土層（耕土層・盛土層・擾乱土層）はバックホーで掘削した。これより下位の遺物包含層については、ジョレンやネジリガマを用いた人力作業で面的に調査した。

遺物の出土位置・遺構平面図・遺構断面図は簡易やり方実測（S = 1/10）で作成した。また、調査区の土層図および遺構全体図も簡易やり方実測（S = 1/40）で作成している。

記録写真の撮影には、ニコン FM2（レンズ 35 ~ 70mm）とキャノン EOS-Kiss digital（レンズ 18 ~ 55 mm）を併用した。そして、35 mm リバーサル・フィルムおよび JPEG 形式で記録した。

**調査の経過** 平成 18 年 6 月 28 日、調査区にバックホーを搬入して表土剥ぎを行い、統いて方眼杭を設置した。同時に調査機材や仮設を搬入した。

翌 28 日から人力での掘削を開始した。7 月 6 日までに遺物包含層（茶褐色土層 = II 層）の調査を終了し、7 月 7 日、III 層（漸移層）で遺構確認作業を行った。検出した遺構は原則的に東西方向で半截し、覆土断面で堆積状況を観察した。これは遺構形状を考慮に入れつつも、地山が東に傾斜することを重視したためであり、また調査区南壁との土層対比を簡便に行うことを目的としたためである。

遺構調査は 7 月 8 日～13 日にかけて行った。7 月 10 日には調査区全体を再度掘削し、IV 層（黄褐色風化火山灰土層）上面で検出遺構を追加した。

7 月 14 日、調査区を精査して完掘写真を撮影した後、遺構全体図を作成した。そして、ユニットハウスをはじめとする調査用資機材の大部分を撤去した。

7 月 15 日、早朝より補足調査（調査区北東隅の深掘調査）と、調査区の埋め戻しを開始したが、突然の豪雨により調査区が水没し、作業中断が余儀なくされた。その後、天候の不安定な日々が続いたが、8 月 1 日、補足調査と調査区埋め戻しを行い、調査を完了した。

**整理の方法** 出土遺物は、水洗いした後、註記をした。遺物の註記は、遺跡略号（TM）と調査年度（06）とを組み合わせた「TM06」に統一して通しの遺物番号を記入した。遺物の記録図（実測図・写真）は調査担当者が作成した。出土遺物・記録写真・記録図などは全て長岡市越路郷土資料館に保管している。

第 1 表 全体工程表

	平成16年							平成17年				平成18年							平成19年							
	12	1	2	3	4	5	6	7	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
事前協議(1)																										
立会調査																										
試掘調査																										
整理作業																										
事前協議(2)																										
本発掘調査																										
整理作業																										
報告書作成																										

## 第IV章 調査の成果

### 1 遺跡の概要

遺跡は越路原Ⅱ段丘面の東端に位置し、本発掘調査によって遺構 32 基と遺物 138 点が確認された。遺構と遺物の様相から判断して、遺跡は縄文時代中期前葉の小規模かつ短期的な活動痕跡の集積であると見做すことができる。

### 2 調査区の堆積状況（図版 1）

遺跡の位置する越路原段丘は、Ⅰ段丘、Ⅱ段丘、Ⅲ段丘へと北東方向に段丘形成されており、調査区も全体的に北東に向かって緩やかに傾斜している。土層の堆積は南北軸においては北、東西軸においては東がそれぞれ厚くなっている。そして、調査区の北端が低くなっていることから、この先に浅い開析谷が存在する可能性が窺える。また、調査区の西側は黒ポク土層が削平され、西端には擾乱や重機のキャタピラ痕が残されていた。これは東西軸の傾斜の方が急であるため、昭和 42 年（1967）の土地改良事業の影響を大きく受けた結果であろう。

今回の本調査区において、表土層（耕土層・盛土層）と黄褐色風化火山灰土層との間に、黒ポク土層を確認した。この黒ポク土層は視覚的に区分される 2 枚のこの黒ポク土層のうち、上位の茶褐色土層を「第Ⅱ層」、下位の漸移層を「第Ⅲ層」、そして黄褐色風化火山灰土層を「第Ⅳ層」「第Ⅴ層」として大別した。前述したように、遺構確認面は第Ⅲ層上面である。一部の遺構については第Ⅳ層上面でプランを確認した。しかし、調査区東壁面で断面の観察ができる遺構（B3-PLB3-P3,C3-P1 など）では第Ⅱ層の中位からの掘り込みを確認している。遺物の包含が概して第Ⅱ層に限定されることを併せると、当時の生活面を第Ⅱ層上半部に指定できる。黒ポク土層中の遺構検出については留意したが、ごく浅い皿状の土坑など、第Ⅱ層中で掘り方が完結している遺構については、検出できなかった可能性もある。

### 3 遺構と遺物の分布（第4図）

遺構は 32 基検出した。分布はほぼ調査区全体に及んでいる。比較的大くしっかりとした遺構は西側に偏っている。一方、遺物も調査区の全域にわたって散漫に分布していた。平面分布には顕著な傾向はないが、南東域にやや濃い平面分布が示される。これら遺構と遺物の分布状況は、遺跡の中心部が今回調査した区域の東側にある可能性を示している。

検出した遺構はいずれも機能・用途を断定し得る材料に欠ける。また、B3-P3 以外は覆土中に遺物は含まれていない。したがって、遺構形状や覆土などから、(1) 比較的しっかりとした土坑、(2) 形状や堆積状況などから柱穴である可能性をもつ土坑、(3) その他の土坑の 3 つに大別した。

(1) には B3-P1・B3-P3・C2-P7・C3-P1 が分類される。B3-P1 は調査区東端で検出された土坑である。平面形は略円形、断面形は台形状を呈する。底部付近からは板状の被熟土塊（図版 4-22）が出土している。

(2) には B2-P6・B2-P8・B2-P11・B2-P12・B2-P14・B3-P4・B3-P6 が分類される。これら土坑は概ね U 字形の断面形を呈し、柱痕跡は主に暗褐色土（第Ⅱ層に由来）、掘り方の埋土には第Ⅲ層や第Ⅳ層に由來する土が堆積する。B3-P6 は深さ 38 cm を測る土坑であり、確認面（第Ⅳ層上面）からの深度が最も大きい。また、覆土は単層であるが、遺構形状から C2-P6・C2-P8・B2-P4・B2-P10 もここに分類しておく。しかし、

これら柱穴と推測される土坑について有機的な配列を抽出することは出来なかった。

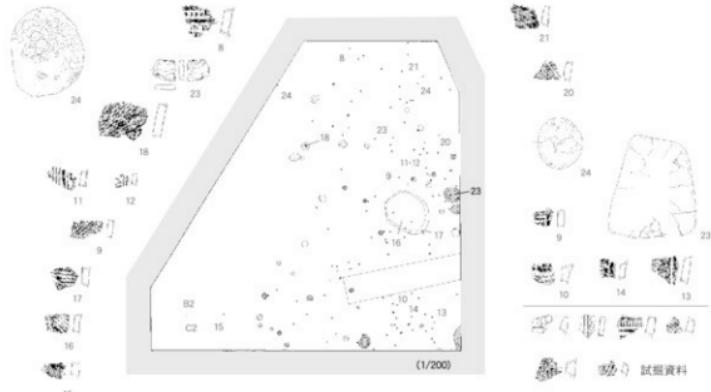
(3)はその他小規模な土坑(pit)がほとんどを占める。このなかで、B2-P15は平面形は長径約2.1m・短径約1.4mの略梢円形、断面が皿状を呈する比較的大形の土坑である。

#### 4 遺物(図版4 写真図版5)

1~7は試掘調査で出土した遺物である。試掘調査では土器のみが出土した。1~3は竹管状工具で施文される一群であり、縄文中期前葉(新崎式対比)に位置づけられる。1は口縁部資料である。波状口縁の端部に連続爪形文が施文され、その直下に一列の刺突が施される。2は半隆起線で縦区画を作り、山形状の沈線文が施される。3は格子目文に含まれる資料である。半隆起線による横位区画の中を縦位沈線で細分し、更に刻みを加えている。4~6は縄文施文の土器である。7は無文の土器である。4~Tから出土した。他の土器と比べ、胎土や焼成的印象が異質である。土師器の小腰部破片である可能性が高い。

8~25は本発掘調査で出土した遺物である。8~21は縄文土器である。8~14は竹管状工具で施文される一群であり、中期前葉(新崎式対比)に位置づけられる。8では連続爪形文と蓮華文が確認される。9は格子目文が施される。10は連続爪形文が確認できる。この爪形文は刺突の角度が小さい。径が大きく平坦に近い形状の工具を寝かせるようにして施文したと推察される。11~14は半隆起線が確認できる。12と13はにぶい赤褐色を呈し胎土が近似する。同一個体であろう。13は可表面が摩滅して視認しがたいが、縄文施文されていた痕跡がある。15~20は縄文が施文される土器であり、21は撫糸文が施される。22は前述の通りB3-P1から出土した資料である。発掘調査時には被然した石皿類として取り扱ったが、整理作業の過程、時間の経過とともに崩れはじめ、石器ではなく土塊であることが判明した。周縁部は丁寧に面取り成形されている印象を受ける。そして中心部がやや凹む。

23~25は石器である。23は安山岩を素材とした剥片(2次加工のある剥片)である。主要剥離面側に2次加工が確認できる。24・25は安山岩の円礫を素材とした凹石である。24は表・裏面に数度の加擊による凹痕が残る。25は石器のほぼ全面に凹痕が残されている。凹痕は実測図正面に顕著である。



第4図 遺構と遺物

第2表 遺構観察表

番号	平面形*	規模** (長径×短径cm)	断面形*	深さ*** (cm)	出土遺物***	備考
B2	P1	略円形	15.3×14.5	U字状	13.5	
	P2	稍円形	16.5×16.0	U字状	13.1	
	P3	略円形	32.8×29.5	U字状	19.0	
	P4	稍円形	16.8×13.6	U字状	21.5	
	P5	略方形	34.5×32.3	弧状	11.8	
	P6	略椭円形	26.0×20.6	U字状	37.2	
	P7	略円形	16.0×15.8	U字状	—	
	P8	略円形	20.0×17.0	U字状	21.8	
	P10	略円形	16.5×14.0	U字状	23.4	
	P11	略円形	17.0×16.8	弧状	17.9	
	P12	略椭円形	22.6×19.8	階段状	13.2	
	P13	略椭円形	37.5×36.0	弧状	9.5	
	P14	略椭円形	20.5×16.4	台形状	11.2	
	P15	略椭円形	208.6×139.7	臺状	14.0	
	P16	略円形	25.0×22.2	U字状	12.8	
	P17	略椭円形	39.5×30.0	—	—	
	P18	略椭円形	48.2×33.0	台形状	12.1	
C2	P1	円形	16.1×14.8	U字状	14.2	
	P2	円形	24.3×20.2	階段状	20.2	
	P3	円形	26.8×24.9	U字状	18.2	
	P4	円形	16.5×15.8	U字状	14.3	
	P5	円形	14.3×13.2	U字状	12.9	
	P6	円形	16.8×15.2	U字状	19.3	
	P7	略椭円形	56.8×47.3	階段状	29.5	2遺構切合い
	P8	円形	20.0×19.5	U字状	21.9	
B3	P1	略円形 (71.3×66.0)	台形状	18.8	被熟土塊	
	P2	略円形 18.0×15.8	台形状	15.2		
	P3	略方形 (33.0×39.5)	U字状	(22.8)		
	P4	円形	16.5×15.0	U字状	18.2	
	P5	円形	29.5×26.0	台形状	13.0	
	P6	円形	24.0×23.5	U字状	18.1	
C3	P1	— (99.5×29.5)	台形状	(11.2)	なし	

\* 平面形・断面形の分類は、加藤[1999]に準拠した。

\*\* 遺構の規模・深さは、確認面での数値。

\*\*\* 出土遺物は明確な遺構覆土からのものを対象。

第3表-1 遺物観察表(1)

no.	地点	時期	文様要素	部位	器面		胎土 粘物など	厚さ (cm)	備考
					色調	表 裏			
1	ZT	縄文中期前葉	爪形文+刺突	口縁部	暗	ナゲ	白	0.8	
2	ZT	縄文中期前葉	半隆起縫+山形文?	胴部	暗		肌	0.6	
3	ZT	縄文中期前葉	半隆起縫+格子目文	胴部上半	暗		白・肌	1.0	
4	ZT	縄文中期前葉	縄文RL?	胴部	暗		肌	0.9	
5	ZT	縄文中期前葉	縄文LR?	胴部	暗		灰・肌	1.1	
6	ZT	縄文中期前葉	縄文LR	胴部	に広い縫		赤	0.7	
7	AT			全体		ハケ目	肌+通	0.6	土師器?
8									
9									
10									
11									
12									
13									
14									
15									
16									
17									
18									
19									
20									
21									
22									
23									
24									
25									
26									
27									
28									
29									
30									
31									
32									
33									
34									
35									
36									
37									
38									
39									
39a									
40									
41									
42									
43									
44									
45									
46									
47									
48									
49									
50									
51									
52									
53									
54									
55									
56									
57									
58									
59									
60									
61									
62									
63									
64									
65									
66									
67									
68									
69									
70									
71									
72									
73									
74									
75									
76									
77									
78									
79									
80									
81									
82									
83									
84									
85									
86									
87									

no.	地点	時期	文様要素	部位	器面			地土 基物など	厚さ (mm)	備考
					色調	表	内			
88		國文中期前葉	圓文LR	脚部	にふく・黄裡			白・肌	0.8	
89			圓文	脚部上半	橙			白・灰	1.1	前期前葉か?
90										
91			—	脚部	橙			赤	0.8	
92										
93			—	脚部?	橙			白・赤・灰	1.0	
13	94	國文中期前葉	半降起輪+圓文	脚部	橙			白・肌	1.0	
95										
96										
97		國文中期前葉	圓文	脚部	にふく・黄裡			灰・肌	0.9	
98			—	脚部	橙			灰	0.9	
99		國文中期前葉	圓文RL	脚部	橙			黑・灰	1.1	
100		國文中期前葉	圓文RD	脚部	橙			白	0.9	
101			圓文	脚部	橙			肌	0.8	前期前葉か?
102-106		國文中期前葉	半降起輪	脚部	橙			肌	1.0	
103										
104										
105			圓文	脚部	橙			灰	0.9	
107										
108			無文?	脚部	橙			白・灰	0.8	
109										
110		國文中期前葉	半降起輪	脚部上半	赤褐色			透・露	0.7	
111		國文中期前葉	圓文LR	脚部	明赤褐			白・肌・透	0.6	
115		國文中期前葉	圓文LR	脚部	にふく・橙			白	0.9	
116		國文中期前葉	圓文RL	脚部	にふく・黄裡			白・肌	1.3	
15	117	國文中期前葉	圓文RL	脚部	明褐			白・灰	1.0	
118										
119										
120										
121			—	脚部?	にふく・黄裡			灰		
122										
123										
124										
125										
126			—	脚部	赤褐			白・透	1.0	
14	127	國文中期前葉	半降起輪	脚部	赤褐			白・灰・黒・露	0.7	
17	128	國文中期前葉	圓文RL	脚部	にふく・橙			白・透	1.1	
21	129	國文中期前葉	圓文	脚部	にふく・褐			肌	0.8	
130		國文中期前葉	八咫文	脚部上半	にふく・橙			赤・灰・肌	0.7	
8	131	國文中期前葉	八咫文+蓮華文	脚部上半	にふく・黄裡			透・灰	1.1	
20	132		圓文RL	脚部	にふく・赤褐			白	0.9	
133										
134		國文中期前葉	八咫文+圓文LR	脚部上半	橙			灰	0.9	

\*斜カケは額片

第3表－2 遺物観察表(2)

図版	no.	器種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考	
44		磨石類	磨板	安山岩	5.45	4.54	3.43	109.19	
45		洞片		頁岩?	3.94	5.40	1.23	29.57	
23	46	2次加工のある洞片		無風品質安山岩	3.59	3.86	0.94	16.90	
53		磨石類	磨板	安山岩	6.34	5.73	3.14	155.29	
54		磨石類	磨板	安山岩	7.47	5.05	1.00	246.89	
56		洞片		無風品質黑色安山岩	6.47	6.40	2.67	139.86	
61		磨石類	磨板	安山岩	7.22	6.03	4.97	29.20	
24	62	磨石類	磨板	安山岩	8.64	7.42	3.75	338.14	
75		磨石類	磨板	砂岩?	(6.15)	(8.03)	(4.94)	(220.11)	
113		2次加工のある繩		燧石?	10.03	5.20	2.64	187.01	
114		磨石類	磨板	安山岩	14.15	9.36	6.77	918.20	
135		磨石類	磨板	安山岩	16.25	13.63	4.48	1506.09	扁平な磨石
25	137	磨石類	磨板	安山岩	30.30	24.46	17.28	15800.00	
		磨石類	磨板	安山岩	17.38	16.73	3.55	1581.66	扁平な磨石

第3表－3 遺物観察表(3)

図版	no.	分類	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考
22	136	板熟土塊	34.84	29.50	6.68	7200.0	土塊?

## 第V章　まとめ

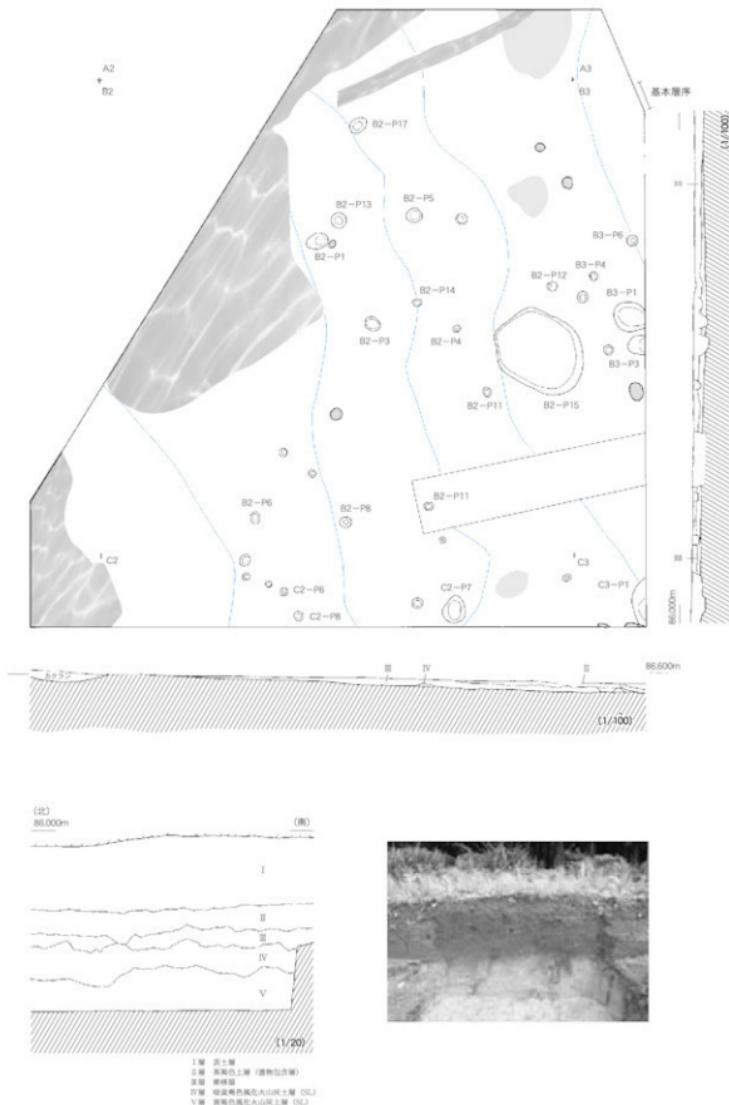
立矛南遺跡の形成時期はほぼ縄文時代中期前葉に限定される。調査で出土した遺物が調査面積 1 m<sup>2</sup>あたり約 1 点であり、極めて散漫な出土状況であった。出土土器はいずれも細片であるが、施文や土器胎土等から概ね縄文時代中期前葉における、ごく短い時期の所産であろう。出土石器は 2 次加工のある剥片を含む剥片類と磨石類（凹石や磨石）によって構成され、いわゆる定型的な石器を含まない。検出した遺構は 32 基であり、うち 11 基が柱穴と推測される土坑であった。簡易的な居住施設に関連するものであると推測されるが、土坑群に有機的なまとまりを見出すことはできず、また、竪穴住居跡や掘立柱建物をすることはできなかった。遺構・遺物分布が調査区南東側に偏ることから、調査区が集落北西の外縁部であることが想定される。したがって、調査区南東域、つまり集落の主体部と推測される範囲における発掘調査が実施された際に立矛南遺跡の性格が判明するだろう。

第Ⅱ章で示したとおり、越路原における当該期の活動痕跡は、上並松遺跡（初頭～前葉）・朝日原遺跡（初頭）・中山遺跡（前葉）などで散見されるが、いずれも小規模であり、拠点的な集落が確認されていない。この点で他の地域とは異なった様相をみせている。これが越路原における地域相なのか、それとも近隣に未発見の拠点的集落が眠っているのか、資料の蓄積を待つて判断したい。

## 引用・参考文献

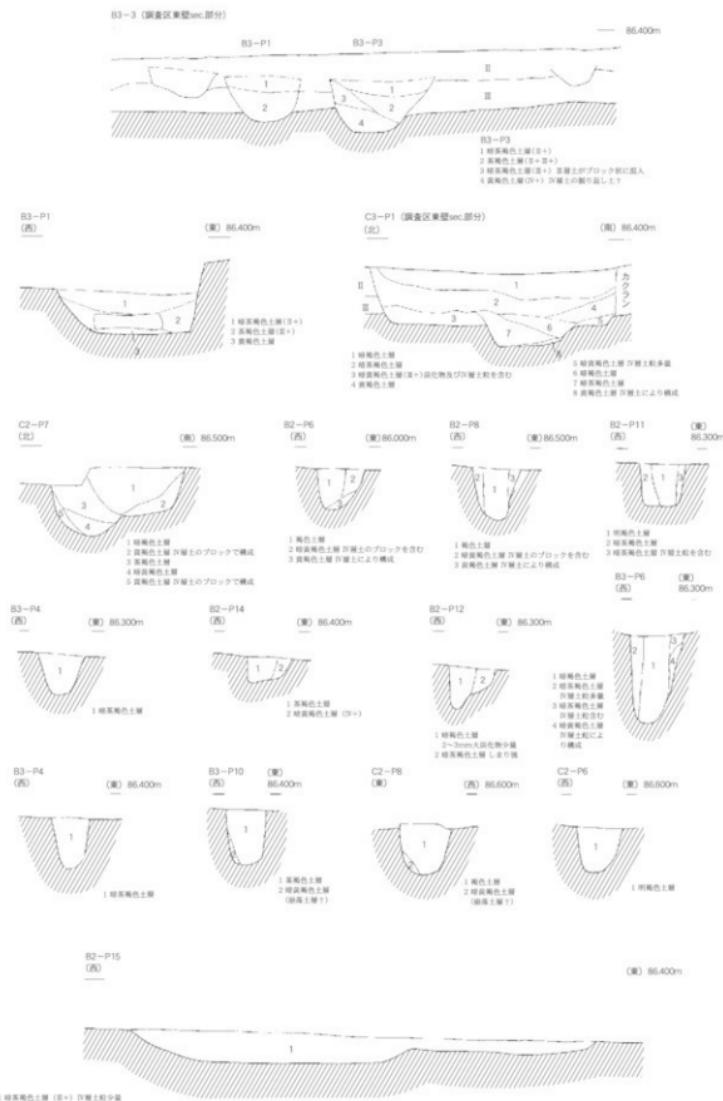
- 飯川健勝 1991 「本州中央部の測地学的変動の研究」『地図研専報』39. 72 頁。
- 1998 「越路町とその周辺地域の地形と構造運動」越路町編『越路町史』資料編 1. 3 - 18 頁。
- 加藤 学 1999 「遺構の形態分類」加藤学編『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 93 集 和泉 A 遺跡』（本文・観察表編）新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団. 28 - 29 頁。
- 越路町 1998 『越路町史』資料編 1 原始・古代・中世
- 越路町教育委員会 1970 『越路原総合調査報告書 朝日百塚・並松遺跡』越路町文化財調査報告書第 3 稿。2004 『朝日原遺跡』越路町文化財報告書第 27 稿。
- 駒形敏朗 1981 「縄文時代の笹山について」『埋蔵文化財発掘調査報告書 笹山遺跡』長岡市教育委員会. 35 - 36 頁
- 長岡市 1992 『長岡市史』資料編 1 考古
- 柳 恒雄 1998 「発達した朝日原・越路原の台地」越路町編『越路町史』資料編 1. 14 頁。
- 渡辺秀夫 1998 「越路町とその周辺地域の段丘面上のローム層について」越路町編『越路町史』資料編 1. 19 - 36 頁。

図版 1 遺構全体図 ( $S = 1/100$ )

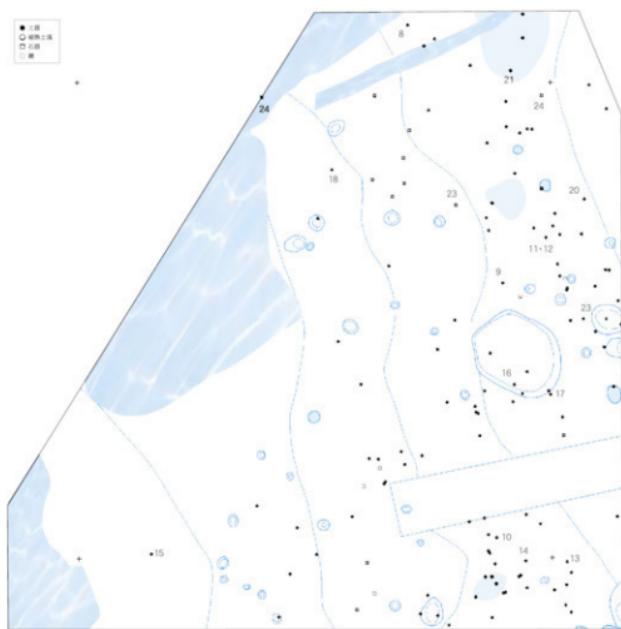


調査区基本層序

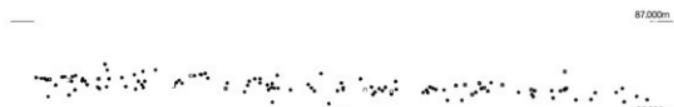
図版2 遺構断面図 ( $S = 1/20$ )



図版3 遺物分布図

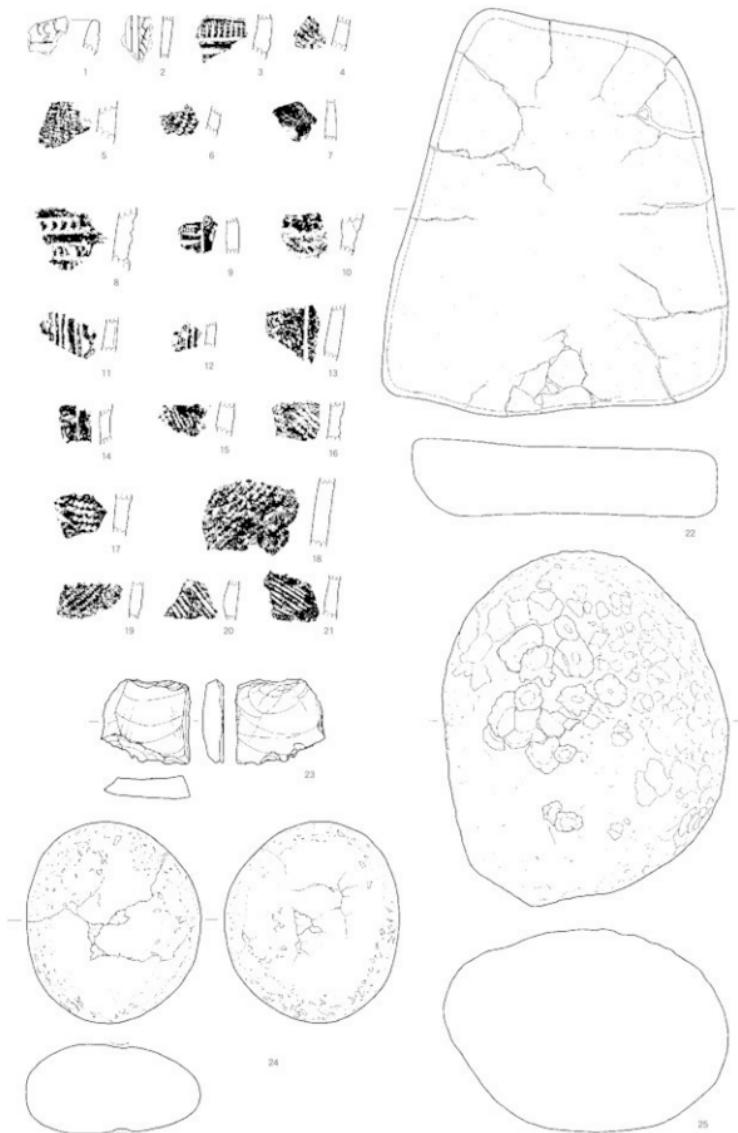


平面分布図 ( $S = 1/100$ )



垂直分布図 (南北軸、水平方向  $S = 1/100$ 、垂直方向  $S = 1/50$ )

図版4 遺物実測図 ( $S = 1/2$  22・25 :  $S = 1/4$ )



図版5 調査状況（1）



調査区完掘状況（西から）



調査区近景（西山丘陵を望む）



調査前現況



表土剥ぎ1



表土剥ぎ2

図版6 調査状況 (2)



包含層調査 1



包含層調査 2



遺物出土状況（南から）



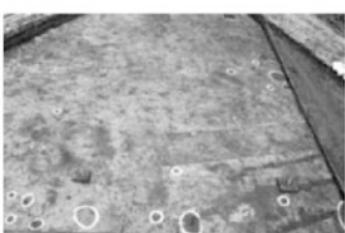
遺物出土状況（北から）



1m 方眼設定作業



包含層調査 3



遺物確認状況（II層上面 南から）



遺物確認状況（IV層上面 南東から）

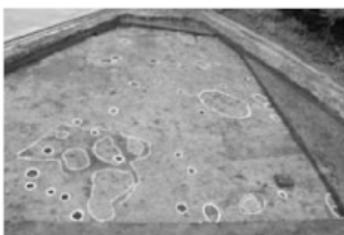
図版7 調査状況（3）



遺構調査1



遺構調査2



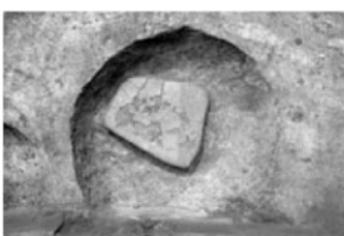
遺構完掘状況（南から）



遺構完掘状況（東から）



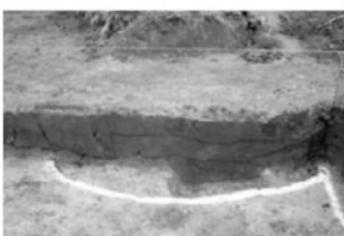
B3-P1半截状況



B3-P1遺物出土状況



B3-P1調査状況

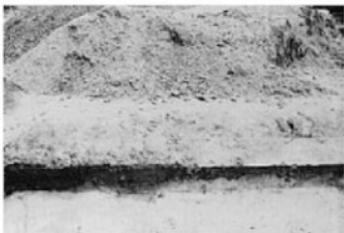


B3-P1完掘状況

図版8 調査状況 (4)



B3 - P6 完掘状況 (北から)



調査区南東層序 (北から)



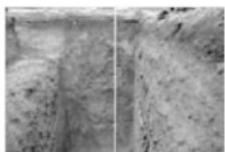
埋め戻し作業



調査完了



1T 完掘状況



1T 層序



3T 完掘状況



4T 完掘状況



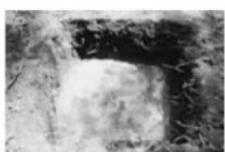
5T 調査状況



5T 完掘状況



6T 完掘状況

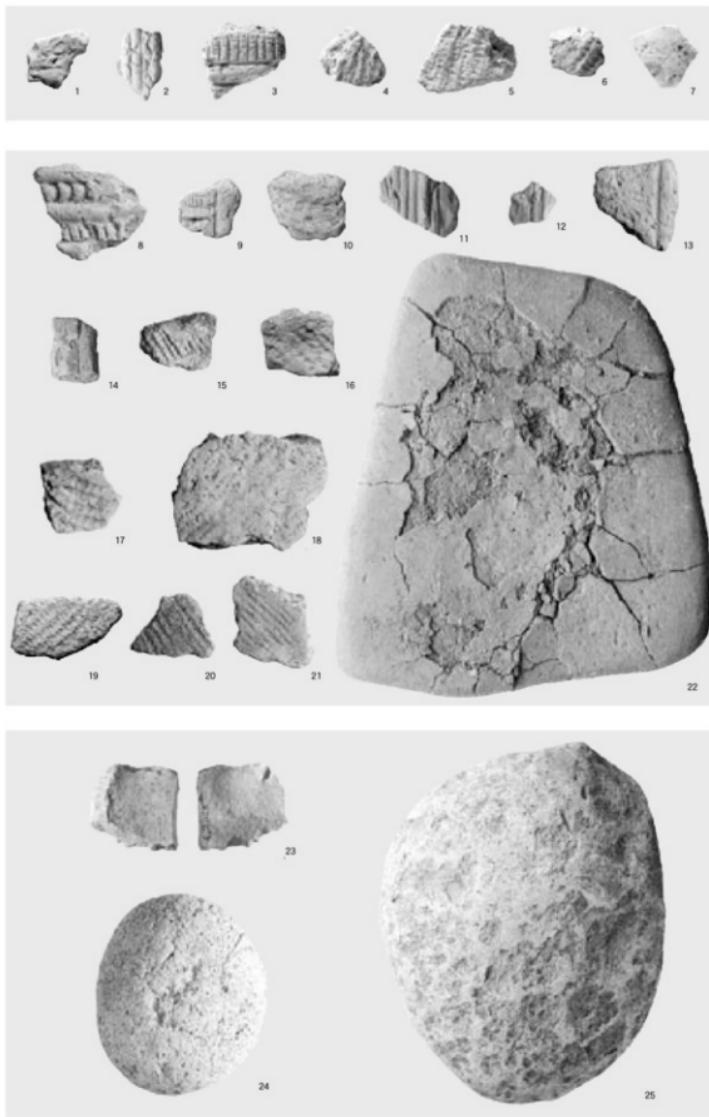


7T 完掘状況



立合調査地点層序 (魚沼線跡)

図版9 出土遺物



(S = 1/2 ただし 22・25 : S = 1/4)

## 報告書抄録

ふりがな	たてほこみなみいせき							
書名	立矛南遺跡							
副書名	特別高圧線鉄塔建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	新田康則							
編集機関	長岡市教育委員会							
所在地	〒940-0072 新潟県長岡市柳原町2番地1 TEL0258-32-0546							
発行年月日	2007年3月30日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
たてほこみなみいせき 立矛南遺跡	にいがたけん ながおかし 新潟県 長岡市 らにこうじ 来迎寺 字 原 あが はら らいこうじ もと	15021	1263	37° 23' 24"	138° 46' 28"	20060628 20060801	136m <sup>2</sup>	特別高圧線鉄塔建設工事
所収遺跡名	種別	主な時期		主な遺構		主な遺物		特記事項
たてほこみなみいせき 立矛南遺跡	遺物包藏地	縄文時代中期前葉		土坑		縄文土器・石器		なし

### 立矛南遺跡

—特別高圧線鉄塔建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書—

平成19年3月26日 印刷

平成19年3月30日 発行

編集・発行 長岡市教育委員会

印刷・製本 北越印刷株式会社